
クリーム色の幸せ

和朶部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリーム色の幸せ

【Nコード】

N9426X

【作者名】

和朶部

【あらすじ】

前回書いた クリーム色の愛 に手を加えてみました。
いちお話としてはこれで満足しています。
よかったら読んでください^^

クリーム色の壁がいい。

付き合ってちょうど一年目の春、明が同棲をしようと言った。そして、部屋を選ぼうと不動産屋に入ったとき、彼が真っ先に言った一言だ。

別に壁の色に興味なんてなかったけど、なるほど。

一年間住むと壁の色の重要性というものがわかってきた。

「白ってさ。嫌なんだよな。寝起きにはまぶしすぎるだろ？」

壁の色になぜそこまでこだわるのかを聞いたとき、明はそう熱く語った。

(他にもなにか言っていたが、そこしか覚えていない。)

確かに、日当たりの良いこの部屋の壁が白だったら、少し眩しすぎたと思う。

それに明のことだからきつと

「りほ。眩しいからいつそ寝室の窓なくさないか？」
なんて本気で言いだしかねない。

その点、クリーム色の壁はいい。

白と違い朝の光を反射させず優しく受けとめるので、寝室全体は優しい光でいっぱいになる。

朝日に包まれる寝室は、どこか異国の地を思わせるほど美しい。

私の大好きな明の寝顔は、優しい光を受けて淡く輝き、

その彼の小さな子供みたいな寝顔を見ながら、頭を撫でる。

そこには、確かに二人だけが共有できる朝の空気があって、光があり、世界がある。

とても幸せだ。

この幸せの命運が、まさか壁の色ひとつにかかっていたなんて。明には感謝してもらいたくないくらいだ。

「ん。りほ？」

今日もいつも通り明の寝顔を見ながら頭を撫でてしていると、くりつとした大きな目が半分開いた。

晴れているのだろう。

部屋はいつも通り優しい光に包まれている。

「おはよう、明。」

「おはよう。」

猫みたいなくびをひとつすると私に小さくキスをする。

「相変わらずだね。」

小さくくすつと笑うと明は不思議そうな顔をした。

「なにが？」

「相変わらず猫みたいだなと思って。」

「うるせーな。」

そう言っ髪を掻き揚げた茶色の髪は、光と混じってやわらかく溶けた。

まるで、エスプレッソにミルクを注ぎこんだように。

「ねえ。今日何の日か知ってる？」

彼のことからきつと覚えていないに違いないのだが、悩む姿がおもしろいのであえて聞いてみる。

「え、今日？なんかあったっけ……？」

「正解はですねえ〜」

「あ、まてまて！言うな！今思い出すから……！」

「制限時間は1分ですよ明さん。」

「短いなおい。」

ん」と唸って悩む明はやっぱりかわいい。

「あ、そうだりほ。」

「ん？ヒントはあげないよ？」

「いらねえよ。左手、見てみ。」

そう言う明の顔は、どこか勝ち誇った顔をしている。

言われるがままに左手に目を落とす。と、

そこには昨日の夜までは確かになかったものがあつた。薬指の上で、朝日を受けて美しくキラキラと輝く宝石。

「明……これって」

しかしそのあとの言葉は彼の唇によって塞がれてしまった。

ああ、やっぱりあなたにはいつまでたっても敵わない。

「結婚しよ。りほ。」

付き合っただけでちょうど二年目の春の朝。

明の声は、やわらかい光の中で優しく響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9426x/>

クリーム色の幸せ

2011年10月26日12時01分発行